

## 言語的差異：現実，認識，不平等

松尾雅嗣

広島大学平和科学研究センター

### **Linguistic Difference: Reality, Perception, and Inequality**

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

#### **SUMMARY**

Linguistic difference often, if not always, reflects, maintains or reinforces inequality between social groups, as is shown in the present author's previous paper. The present paper attempts to clarify the process through which linguistic difference performs such functions. The linguistic difference between social group is actually a quantitative one not to be reduced to the bipolar or binary category of total difference or total identity. An examination of historical and contemporary examples clearly shows that actual linguistic difference is realized as a bundle of quantitative differences of individual linguistic items, and caused by a variety of factors including the difference between the groups in question. In perception, however, the difference is reduced to the bipolar form of simple difference or identity, and ascribed to a single factor, that is, the group difference. More importantly, such perception is frequently accompanied by a binary value judgment on the groups concerned. Thus, the actual quantitative multi-faceted linguistic difference not to be attributed to a single factor is transferred to the binary value judgment about the social groups in question, which performs func-

tions of reflecting, maintaining, reinforcing, or, in some cases, revolting against, the existing unequal relationship.

## 目 次

はじめに

1. 言語様式とその差異
2. 差異と同一性
3. 包含と欠如態
4. 確率的差異の認識

結語

## はじめに

世の中には権力を握る者たちの言葉と、見棄てられていく一方の者たちの言葉があるのだ

ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』

民族、エスニック集団、地縁、血縁集団、機能集団を含む諸々の社会集団は、しばしば他の集団と異なる言語を有する。逆に言うならば、ひとつの社会、国家、帝国を構成する諸集団の言語は均一ではなく、程度の差こそあれ、しばしば異質である。そして、かかる言語的差異は、しばしば集団を他の集団と分かつ唯一ではないにせよ重要な指標と見なされる。そして、集団間の言語的差異は、拙稿で既に明らかにした如く、集団間の政治的、経済的、社会的あるいは文化的不平等ときわめて密接な関わりをもつ、即ち、それは集団間の不平等を反映、維持、あるいは強化しうる（松尾 1989）。

言うまでもなく、言語様式の差異が、すべての国家や社会において、常に不平等の反映であったり、それを維持、強化するわけではない。例えば、コロンビア・ブラジル国境に住むヴァウペス (Vaupés) ・インディアン社会は、20以上の相互に理解不可能な言語を有する外婚父系制言語集団、しかもほぼ平等な集団に分れると言われるが、その言語的差異は、不平等とは関わりなく、同一言語集団内部での婚姻を禁止するという形で、もっぱら通婚圏を規定する要因としてのみ機能する (Jackson 1989 58-59, 61-62, 64)。言語的差異が、ヴァウペス社会に

おける女性の分配，交換の単位として機能している点に性差別を見れば別ではあるが。

あるいはまた，言語集団間の「多極共存型民主主義」の典型とされるスイスのごとき国家も存在する。勿論，周知の如く，スイスにおいてさえ，ドイツ語州であるベルン州におけるフランス語系ジュラ地域の紛争だけでなく（Steiner 1985 147, 152, Steiner 1990 112），スイス全人口の1%を割った（McRae 1983 50）南部のグラウビュンデン州におけるレト・ロマン語少数集団の処遇という長期的にはより深刻な問題も存在する（McRae 1983 217, 227）。

このような事例を数多く上げることはさほど困難ではないにせよ，言語的差異が集団間の不平等を反映，維持，あるいは強化するという先に述べた命題が妥当する事例がきわめて多いこともまた否定できない。従って，集団間の言語的差異と不平等の関わりは，従来等閑に付されていただけに，十分検討に値する問題である。このプロセスを明らかにすることが本稿の目的である。

集団間の言語的差異が不平等に関わるプロセスを明らかにするためには，まず第一に，言語的差異とは何かを明らかにしなければならない。集団間の言語的差異と言われるものの実態を仔細に検討すれば，それが，特定の集団間のの差異に起因するのみならず，他の多くの要因に起因することが明らかである。かつまた，このような差異は，一般に，二者択一的な，言わば定性的な差異としてではなく，量的確率的な差異として実現される。

にもかからわず，集団間の不平等に関わる言語的差異は，他の要因に起因する側面や，集団内部の変異を捨象され，集団それ自体の定性的な差異として，即ち集団それ自体の属性として機能する。ここには，言語的差異の現実とその認識の明らかな乖離が存在する。それゆえ，言語的差異と集団間の不平等の関わりを明らかにするためには，言語的差異が，どのように認識され，ひいては評価されるかを解明しなければならない。本稿は，言語的差異を現実と認識のふたつのレベルに分けて分析することにより，言語的差異が集団間の不平等を反映，維持，強化するプロセスを解明しようとするものである。

## 1. 言語様式とその差異

言語的差異を論ずるとき、個別「言語」、「方言」といった概念が不適當であることは既に示唆した(松尾 1989 68-69)。主たる根拠は、ふたつ上げられよう。

第一に、多くの言語学者、社会言語学者が指摘するように、個別言語相互あるいは個別言語と方言を弁別する普遍的客観的基準は存在しない(Trudgill 1974 15-17, Rubin 1976 392-395, Lyons 1981 283-284, 田中 1981 9-10)。それは、当該の集団が、自らの言語を、固有のもの、隣接集団のそれとは異なるものと見なすか否かによって決まる(Rubin 1976 395)、あるいは極端な言い方をすれば、当該集団がそれに固有の名称を与えるか否かによって決まる(田中 1981 160)と言うべきである。

実際、このような例は、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語の関係(Haugen 1990 147, 151)、セルビア語とクロアチア語の関係(木戸 1977 10)、ルーマニア語とモルダヴィア語の関係(萩原 1989 173, Mallinson 1990 295)、ドイツ・オランダ国境における、「低地ドイツ語」の帰属の問題(Comrie 1990 2)、スペイン語、ポルトガル語とは独立した言語と見なすべき言語であり、また明らかにスペイン語よりポルトガル語に近いにもかかわらず、一般にはスペイン語の方言とされるガリシア語(Green 1990 194, Parkinson 1990 250)、中国語、ケチュア語とその諸「方言」の関係(Rubin 1976 394-295, Li and Thompson 1990 85)、あるいは「ウチナーグチ(沖縄口)」と日本語の関係(外間 1977 210)など枚挙に暇がない。

ただ、「言語」や「方言」という概念があまりに曖昧であり現実の言語的差異を分析する概念としては使用に堪えないことと、それが一般に実体として認識されていることとは厳密に区別しておく必要がある。けだし、後述のように、このような認識はきわめて重要な意味をもつがゆえである。

第二に、個別言語、方言といった概念では、上流の言葉と下層の言葉、男性の言語と女性の言語、あるいはバーンステイン(Basil Bernstein)の「精密コード」と「限定コード」(Bernstein 1972 163-164)、エーデルマン(Murray Edelman)の言う「扶助専門職(helping profession)」の言語(Edelman 1977 20)といっ

た言語ヴァライアテイあるいは文体といったレベルの差異を論ずるには不適當である。なぜなら、このような差異は、通常の意味での言語内的現象であると同時に、個別言語や方言、別の観点からすればひとつの社会、を越えた共通性をも有するからである (O'Barr 1976 20, Bailey 1976 160)。

それゆえ、拙稿では、言語的差異の分析概念として言語様式なる概念を提起した (松尾 1989 69-70)。ただし、拙稿では、言語様式は、ふたつの集団の言語的差異に関わる言語要素のみを構成要素とする集合と定義されているが (松尾 1989 69)、言語的差異とその認識のあり方を分析するためには、言語様式のこの定義は、言語的共通性を無視した点で、不十分である。それゆえ、ここでは、言語様式なる概念を、さしあたり、言語を構成する音韻、語彙といった諸構成要素とその結合規則とから成る集合と定義する。

この定義に従えば、任意の言語様式 A は、その構成要素の集合として次のように示すことができよう。

$$A = \{ \text{構成要素}_1, \dots, \text{構成要素}_i, \text{結合規則}_1, \dots, \text{結合規則}_j \}$$

あるいは、ハドソン (Richard A. Hudson) に倣って、この集合の要素を一律に「言語要素」(Hudson 1980 21-22) と呼ぶならば、上式は、以下のようになるう。

$$A = \{ \text{言語要素}_1, \dots, \text{言語要素}_i \}$$

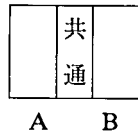
ここで定義した言語様式なる概念は、一方の極における単一の、例えば /r/ を発音するといった言語要素の差異をも説明しうると同時に、他方の極においては、言語要素のきわめて複雑な組合せあるいは相互関係としての構造である単一の個別言語、さらには極限的形態としてロマンス系諸語、ケルト系諸語など複数の個別言語を包含する概念となる。

このような、語彙、音韻、文字、文法といった言語の個別的要素の差異から、個別言語の差異に至る間での多様な差異を包摂し、一元的に把握することを意図する概念は、筆者の独創ではなく、萌芽的な形では、様々な論者により提起されている (松尾 1989 69-70)。事実、ここで言う言語様式概念は、ハドソンの言

う「ヴァライアテイ (variety)」の概念 (Hudson 1980 24-25) の拡張であると言っ  
てよい。

言語様式をこのように定義するとき、ふたつの集団の言語様式 A, B の関係  
は図1のように図式化されよう。ふたつの言語様式がまったく同一である場合、  
完全に異なる場合、即ち共通要素をまったくもたない場合も想定しうが、こ  
こではこれについては触れない。いずれにせよ、言語様式の差異を、図1のよう  
に定義するならば、言語様式の差異は、一般に言語相互の差異とされるものであれ  
方言のように言語内的差異とされるものであれ、定性的な差異ではなく、量的な  
差異にすぎないことが明らかである。しかも、後に明らかにするように、差異の  
度合い自体も、固定したものではなく、確率的に変動する場合が少なくない。

図1 言語様式の差異



言語的差異と集団間の不平等の関係においては、ここで定義した言語様式の差  
異が、どのような言語的差異として認識されるか、あるいはされないかが重要な  
意味をもつ。

以下、言語様式の現実の差異がどのように認識され、それがいかに集団間の不  
平等に関わるかを、典型的な事例の検討を通じて明らかにする。

一般的に言えば、現実には量的な差異であるふたつの言語様式の差異は、両者  
に差異があるかないか、即ちふたつの言語様式が異なるものであるか、同一の  
ものであるかという定性的な形で認識される。

## 2. 差異と同一性

前節で定義した言語様式の差異と、それが当該集団あるいは他の集団によって  
どのように認識されるかの間には必然的な関係は認められない。確かに、後に検  
討する事例にも見られるように、ふたつの言語様式の差異に関する認識は、一般

には、量的差異としてではなく、異なるかそれとも同一であるかという形で双極化する。しかし、このように定性的に認識される場合でも、言語様式の現実の差異の大小と、ふたつの集団が、言語のどのようなレベルにおいてであれ、言語的に異なるあるいは異なるないという認識とは、一般には、対応しない。ましてや、認識の基礎となる、言語に即した客観的な基準が存在するわけでもない。実際、相互的な理解可能性 (mutual intelligibility) という一見客観的な基準も普遍妥当性をもたない (Comrie 1990 2-4)。北欧3言語の例に見られるごとく、前掲の様々な事例は、このことを明白に示している。

このことを端的に示す例を挙げて見よう。インドの国勢調査によれば、方言を含めたインドの言語数は、1951年、61年、71年でそれぞれ約800、1650、3000であったという (Apte 1976 141, Chaklader 1990 208)。領土、人口構成等の大幅な変動があればともかく、この言語数の激増は、言語様式の差異に関する認識の変化を意味すると解するほかあるまい。即ち、従来自らの言語様式を他の集団の言語様式と同一であると認識していた集団が、それを異なるもの認識しはじめたことを意味するのである。

さらに劇的な例を、インドのビハール州北部に集中的に居住するマイティリ (Maithili) 人に見ることができる。1951年の国勢調査では、マイティリ語を母語と回答したのは、約9万人弱であった。ところが、1961年の国勢調査では、これが約498万人に急上昇した (Chaklader 1990 130-131, 207)。これは、言語様式の認識の変化を示す典型的な例である。そして、このような短期間における認識の変化の原因を、言語様式の、従ってその差異の変化自体に求めることは不可能である。マイティリ人の集団としての意識の覚醒といった、政治的社会的経済的要因に求めなければならないことは言うまでもあるまい。

確かに、国勢調査におけるこの種の言語調査結果の信頼性に問題がないわけではない。調査方法、集計方法は別としても、母語や第二言語に関する回答自体が、政治的経済的社会的要因により、現実のそれを正確に反映しないことがあるからである (Motyl 1987 93 Note 6, Anderson and Silver 1990 124 Note 3)。例えば、パンジャブのパンジャビ語を母語とするヒンドゥー教徒は、シーク教徒への対抗上、しばしばパンジャビ語ではなくヒンディー語を母語として回答したとされる



(広瀬 1989 265)。また、少数言語集団特に部族言語の使用者が、よりprestigeの高い言語を母語と回答することもある (Gumperz 1971 3)。西ベンガル州やアッサム州では、少数言語集団が、自らの母語ではなく、ネパール語を母語と回答した例もある (Chaklader 1990 273-274)。同様の事例は、ソ連の場合にも見られるという (Comrie 1981 3)。これとは逆に、エストニアでは、母語あるいは第2言語としてのロシア語使用者の比率が、1970年の国勢調査における28.3%から、1979年の国勢調査における、24.1%に低下し、連邦構成共和国中最低となった。これを説明しうるのは、ロシア化、ロシア語化に対するエストニア人の抵抗の意思表示以外にはありえない (Raun 1985 29)。

このような事例が、国勢調査結果の不備を示すものであることは否定できない。しかし、このような事例は、我々の問題関心からすれば、それ以上に重要な意味をもつ。それが不平等の問題に直ちに関わるわけではないにせよ、言語様式の差異の認識が、言語外的な政治的経済的社会的要因にいかに関係するかを示すからである。

言語様式の差異の認識が、様々な要因によって、異なるか同一であるかいずれかの単純な二分法に帰結することは、上の例からも明らかであるが、言語的差異に関する認識が常にこのように単純であるわけではない。図1に示した図式に従えば、ふたつの言語様式の差異と共通性を共に認めながら、最終的には、差異あるいは共通性のいずれかを強調するという形をとることも少なくない。しかも、いずれの場合にしろ、その認識なり判断には、政治的経済的社会的要因、場合によっては意図、が作用する。このことは、異同いずれの認識にせよ、集団の優劣、階層関係に関する価値判断が、分かち難く纏いついてくることを意味する。

19世紀後半のウクライナを例として取り上げてみよう。ただし、以下の議論は、ロシア帝国領であったウクライナ東部に関するものであって、オーストリア＝ハンガリー帝国領であった西ウクライナ、ガリツィア地方では事情が異なり、ウクライナ語は教育用語としても認められていた (Wexler 1974 39-40)。

1863年6月帝政ロシアの内相ヴァルナーエフは、ウクライナ語に関して、次のように述べている。

固有の小ロシア語などというものは、かつて存在しなかったし、今も存在もしないし、将来も存在しえない（中略）

庶民の話す小ロシアの方言は、ポーランド語に汚染はされてはいるが、まさにロシア語そのものである。ロシア語は、大ロシア人とまったく変わらず小ロシア人にも理解されており、しかも、一部小ロシア人とポーランド人がでっちあげたウクライナ語と称するものより、はるかによく理解されている（Solchanyk 1985 58 に引用）。

ここでは、ウクライナ語とロシア語の間に、前者が「ポーランド語に汚染されている」という差異を認めながら、結論的には、両者の同一性を強調し、それゆえにウクライナ語は存在しないことが強調されている。差異ではなく、共通性、ここでは理解可能性という基準による共通性が重視される。しかも、これは、当時の帝政ロシア官僚の支配的な見解であった（Solchanyk 1985 58）。確かに、ロシア語とウクライナ語の間には、高い相互的理解可能性があり（Comrie 1981 145, Motyl 1987 90）、この見解が、まったく根拠のない事実誤認や曲解であるわけはでない。しかしながら、他方で、ロシア語のウクライナ方言に対する、従って「大ロシア人」の「小ロシア人」に対する優越という露骨な価値判断を伴うこの認識は、ツァー政府の言う「ウクライナ分離主義」（Solchanyk 1985 59）を抑圧することを意図したきわめて政治的な意味をもつ。その政治性は、二重の意味で明らかである。

第一に、1850年代末から60年代初頭にかけてのウクライナは、ウクライナ文化運動の再興を見た（Solchanyk 1985 58-59, 中井 1990 84）。それは、ハプスブルク、ロマノフというふたつの「諸民族の牢獄」に閉じ込められた非支配民族の例に洩れず、母語復興運動という著しい特質をもっていた（Wexler 1974 40, Ra'anán 1990 16）。下層階級のための日曜学校が設立され、ロシア語と共にウクライナ語でも教育が行われ、ウクライナ語を初等教育における教育用語とすることを求める請願も出された（Solchanyk 1985 59）。ここでは、ウクライナ語は明らかにロシア語とは異なるものと認識されている。そして、この認識が、ウクライナの従属的な地位からの自立を希求する意志にもとづくものであることは言うまでもあるまい。

第二に、このようなウクライナ民族運動に対して、ロシア政府は、ウクライナ

語の存在を公式には否定しながら、現実にはそれを禁止するという矛盾した政策を取らざるをえなかった。1863年のヴァルナーエフのウクライナ語禁止令が「秘密回状」という形式を取ったのは (Solchanyk 1985 58), まさにこのゆえである。ウクライナ語は1876年のエムス法により、公的な場から追放されることになるが (Solchanyk 1985 61, 中井 1990 85-86), ウクライナ語とロシア語を同一視することは、ウクライナ人に対する支配の強化にはかならない。

このように、言語的差異をどのように認識するかは、19世紀後半のウクライナに関して言えば、ロシア人とウクライナ人あるいは「大ロシア人」と「小ロシア人」の間における明白な不平等を反映し、かつそれを維持あるいは打破する機能を有したのである。ウクライナ語が、「(ロシア語とは) ……重要な相違点があり、れっきとした独立言語である」, 「現在ウクライナ語が独立言語であることを疑うものはいない」(中井 1990 85) ことを肯定するか、否定するかは、不平等を肯定するか、否定するかという意味をもったのである。

周知の如く、革命以後、ウクライナ語は独立の言語として政治的に認知された (Wexler 1974 33, Solchanyk 1985 67)。ロシア語とウクライナ語が、革命で急変したわけではない。変化したのは、認識のほうである。しかし、ウクライナ語とロシア語というふたつの言語様式を異なるものと認識することは、革命以前にもっていた意味とは、別の意味をもつことになる。ウクライナ語は、ロシア語と対等の地位を獲得はしたが、それは、「宣言上のウクライナ化 (declarative Ukrainization)」(Solchanyk 1985 67) とも言うべき名目的なものであった。1920年代と60年代を除けば、ウクライナ化は遅々として進まなかった (Solchanyk 1985 70, 80, 82, Motyl 1987 105)。生活のあらゆる場面でロシア語が優先し (カレル＝ダンコース 1981 310, Solchanyk 1985 84-85, 89-90, Motyl 1987 90-92, 101, 中井 1990 97, 100), 「小ロシア化 (Little Russianization)」とも言うべきウクライナのロシアへの従属状況が継続している (Motyl 1987 103)。

ここにおいて、ウクライナ語とロシア語が異なるものであるという認識は、ロシア語の優越とウクライナ語の従属を意味する (Solchanyk 1985 91-92)。そして、ウクライナ語ではなくロシア語を使用することは、ロシア民族のヘゲモニーに対するウクライナ民族の恭順の象徴的証なのである (Motyl 1987 103)。言語様式

間の差異を強調することは、不平等を反映、維持、固定する機能をも果しうるのである。他方、1989年のウクライナ共和国におけるウクライナ語公用語化に見られるように(中井 1990 102)、差異を強調することは、逆に従属からの脱却をも意味しうる。

以上、ごく手短かに検討したウクライナ語の事例からも、言語様式の差異に関する認識が、異なるか同一であるかという二極的定性的な認識に収斂することが明らかである。しかも、それが、これまた二値的なあからさまな価値判断を伴うものであることも、同様に明らかであろう。ここに見られるのは、まさに、一般意味論の言う二値志向(Hayakawa 1963 192-193)にはかならない。

### 3. 包含と欠如態

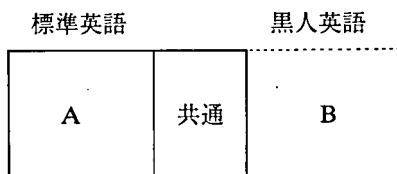
言語様式の差異が、異同というより、むしろふたつの言語様式の包含関係として認識されることもある。この場合、包含される言語様式は、部分集合として、それゆえに欠如態として認識される。これに価値判断が伴うのは明白である。ひとつだけ例を上げておく。

米国では「貧困に対する闘い」のなかで、貧困対策としての教育のための多くのプログラムが実施された。ここで最大の問題となったのが、貧困家庭児童の言語あるいは言語能力の問題であった。多くの教育学者、心理学者などが、貧困家庭児童、とりわけ黒人貧困家庭児童の言語と知的能力には決定的な遅れがあると主張した(Baratz 1970 11-12, 14, Labov 1970 153)。問題は、この「言語能力欠如論」である。異論もあり、定説とも言い難いが(Chall et al 1990 4)、多くの教育プログラムの挫折(Baratz 1970 12)の原因は、この「言語能力欠如論」という根本的仮定の誤りに求められるという議論を検討して見よう。

黒人貧困家庭児童の言語能力の欠如の論拠とされたのは、膨大なテスト結果であったが、それらのテストは標準英語の能力のテストであった(Baratz 1970 16)。黒人児童の母語は、今日「黒人英語」と呼ばれる英語である。標準英語と合流しつつあるか、それから分岐しつつあるかに関しては論議が分れるにせよ(Butters 1989 1-5)、黒人英語は、独立の、それ自体で完結した言語様式である(Labov

1970 154, 184)。この立場に立つならば、標準英語と黒人英語の関係は、前掲図 1 に示した如く、差異と共通性をともにもつものとして理解しなければならない。これが、黒人児童の言語能力に関する「差異理論」(Williams 1970 3) の立場である。そして、この立場からすれば、黒人児童の言語能力を測るならば、その固有の言語様式によって測るべきであって、標準英語によって測るべきではない。標準英語を基準として言語能力を測ることは、標準英語という言語様式の能力を測ることであって、言語能力一般を測ることではない。標準英語を基準とすることは、図 2 の太線で示す標準英語しか認識していないこと、同じことであるが、

図 2 言語欠如論



図の B の部分即ち黒人英語に存在し標準英語に存在しない黒人英語固有の諸要素を無視することを意味する。この枠内で考える限り、黒人英語は、図の共通部分に限定され、標準英語に包含される、標準英語の部分集合としてのみ認識されることになる。このような認識が、黒人英語は、標準英語の欠如態、即ち図の A の部分を欠いたものという認識をもたらすことは、明らかである。黒人英語は欠如態であるという認識を暗黙のうちにであれ前提としたテスト結果が、同じ認識をさらに強化したことは言うまでもあるまい。「言語能力欠如論」の論拠は、黒人英語と標準英語との差異を黒人英語の欠如と誤解したところにある。このような致命的な誤認の背景に白人文化の優位性とまではいかなくても、その正当性、単一性に対する暗黙の仮定があったことは否定できないであろう (Williams 1970 9)。

この意味で、欠如態という認識が、米国社会における白人集団と黒人集団の不平等な関係を反映したものであり、またそのような認識を前提とした努力が、むしろ黒人貧困家庭児童の「言語能力欠如論」という形で不平等を拡大再生産したと言うことができよう。

#### 4. 確率的差異の認識

ふたつの言語様式の差異は、既に述べたように、全体としては量的である。しかし、言語様式を構成する個々の言語要素に関しては、その差異は定性的でも量的でもありうる (Sankoff 1989 47)。ここでは、量的な差異を取り上げ、それがどのように認識されるか、そしてその認識がどのように不平等に関わるかを検討する。

単語中の特定の位置にある英語の /r/ の発音、所謂「母音後の」/r/あるいは「狭窄音 (constricted)」/r/ (Labov 1972 192) を例として検討してみよう。例えば、“car”, “cart”, “far”, “farm” などの単語中の /r/ 音がそれである。この音の発音の差異は、後に掲げる調査結果が示すように量的なものである。

まず、英国においては、他の条件が同じであれば、この音を発音しないことが、プレスティジ・シンボルである。逆に、米国においては、他の条件が同じであれば、この音を発音することが、プレスティジ・シンボルである (Trudgill 1974 21)。図式的に示せば表 1 のようになる。

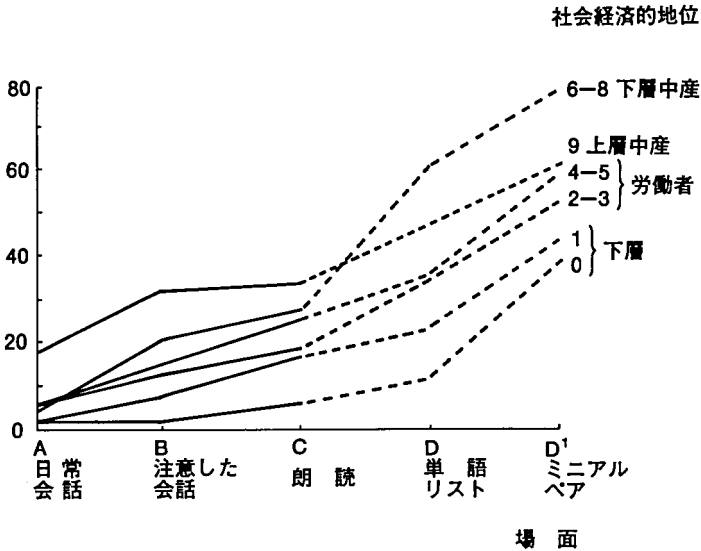
表 1 「母音後の」/r/の発音とその社会的評価

	英国	米国
発音しない	○	×
発音する	×	○

この /r/ 発音の有無に見られる言語様式の差異は、如何なる要因によって、生ずるのであろうか。当面の関心からすれば、不平等な複数の集団の間の差異によって説明できるものであろうか。ラボブ (William Labov) らのニューヨークにおける実態調査によれば、この /r/ 音を発音するか否かは、図 3 に示すごとく、社会経済的地位と明確に相関する。即ち、場面の如何にかかわらず、社会経済的地位が低ければ低いほど /r/ 音を発音する度合いは低くなる。また、逆も成り立つ。この発音の有無が社会経済的格差を反映することは明らかである。

### 図3 /r/の発音と社会経済的地位と場面との相関

縦軸は、/r/が発音が行なわれる度合いを示す



出所：William Labov (1972), p. 192

しかし、図3のデータは、問題の/r/の発音が社会経済的地位と高い相関を示すのみならず、場面の公式性、あるいは注意の集中度とも明らかに相関することをも示す。即ち、社会経済的地位の如何にかかわらず、場面の公式性もしくは注意力の集中度が高まれば高まるほど、/r/が発音される度合いは大きくなる。

それゆえ、/r/を発音するか否かは、少なくともふたつの要因、即ち社会経済的地位と場面によって定まる。ラボフは、/r/が発音されない度合い（あるいは、結果的には同じことであるが、発音される度合い）は、社会言語学的変数、即ち社会的要因によって変化する言語的変数、であるとして以下の関数を提案する (Labov 1972: 190)。

$$k = \alpha(\text{SEC}) + \beta(\text{Style}) + C$$

where  $k$ =nonstandard pronunciation index

SEC=socioeconomic class

Style=formality of the context

$C$ =constant

しかしながら、/r/の発音の有無に関わる要因は、これだけに限らない。デトロイトの黒人世帯の調査データによれば、/r/の発音は、性別とも高い相関を示す (Trudgill 1974 92)。即ち、社会経済的地位の如何にかかわらず、女性のほうが/r/を発音する割合が高い。実際、後の表2、表3に示すように、他の地域での別の項目に関する調査結果にも見られるように、一般に、女性のほうが、標準的あるいは社会的に威信があるとされる形を使用する比率が高いことが知られている。

この点を考慮に入れるならば、ラボブの関数は次のように拡張できる。

$$k = \alpha(\text{SEC}) + \beta(\text{Style}) + \gamma(\text{Gender}) + C$$

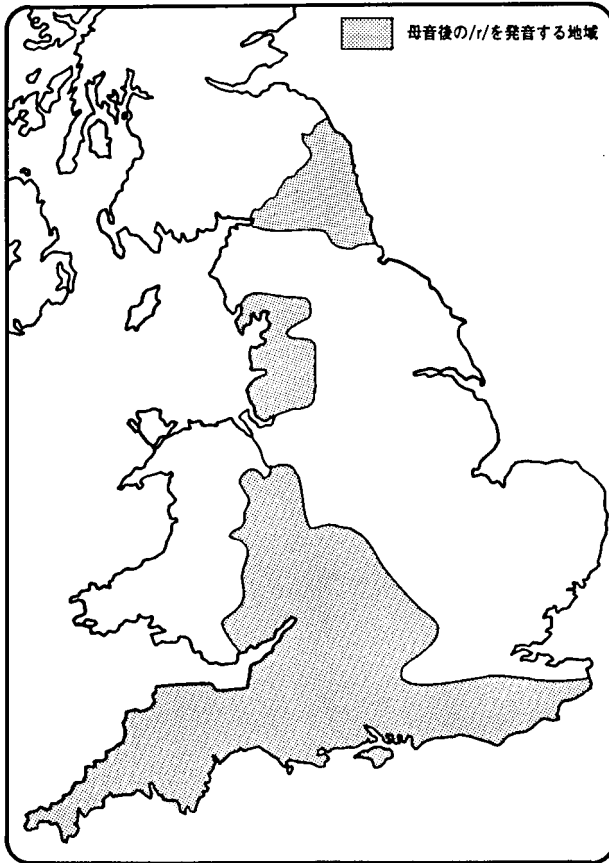
但し、ここでは、Gender は、性別を示し、何らかの順位尺度の変数であるものとする。

/r/音の発音に関わる変数は、これだけとは限らない。この母音の後の/r/は、図4に示すイングランド農村部での調査結果によれば、所謂ケルト系周辺部は別として、周辺地域の農村部に濃厚に残存している (Trudgill 1974 158)。ここに、都市と農村、中心と周辺といった地域差を見ることもできる。とするならば、英国における非標準的な/r/の発音には、都市と農村、あるいは地域という変数も考慮しなければならない。

以上の考察から、母音の後の/r/の非標準的な発音が行われる度合いは、(あるいは、同じことであるが、標準的な発音が行われる度合いは)、社会経済的地位のみならず、他の多様な要因によっても定まることが明らかである。しかし、ことはこの発音に関与する有意味な要因あるいは変数だけの問題ではない。図3に示したデータは、/r/の発音が、単純な線形のモデルでは近似できないことを示している。



図4 イングランド英国農村部における母音の後の/r/の地域分布  
(農村部を対象とした調査結果)



出所：Trudgill 前掲書，p. 159

それは、図3における下層中産階級の行動である。下層中産階級は、言語行為の公式的な度合いが高まるにつれ、不自然なまでに高い使用率を示す。これは、言語学で言う過剰矯正 (hypercorrection) である。ラボフは、下層中産階級のこのような言語行動様式を、「言語的不安定度」なる概念によって説明することを試みているが (Labov 1972 193-194)、下層中産階級のこの言語的不安定は、逆

に彼らの社会的経済的不安定の反映と解することもできよう。いずれにせよ、このようなデータを説明するためには、社会経済的地位と場面という2変数間に何らかの関係を想定した、即ち変数相互の独立性を否定した非線形モデルが必要となる。例えば、サンコフ (Gillian Sankoff) は、次のようなモデルを提案している (Sankoff 1989 29-30)。

$$k=1(1-p_0)(1-\alpha(A))(1-\beta(B))\dots(1-\omega(Z))$$

ただし、

A, B, …… , Z : 社会言語学的変数

$P_0$  : 1/変数の数

いずれにせよ、以上のことから、/r/の発音の有無は、社会経済的地位だけでなく、他の互いに独立であるとは限らぬ複数の要因によって定まることが明らかである。これは、/r/の発音の差異を、社会経済的階層の差異にのみ帰することができないことを意味する。

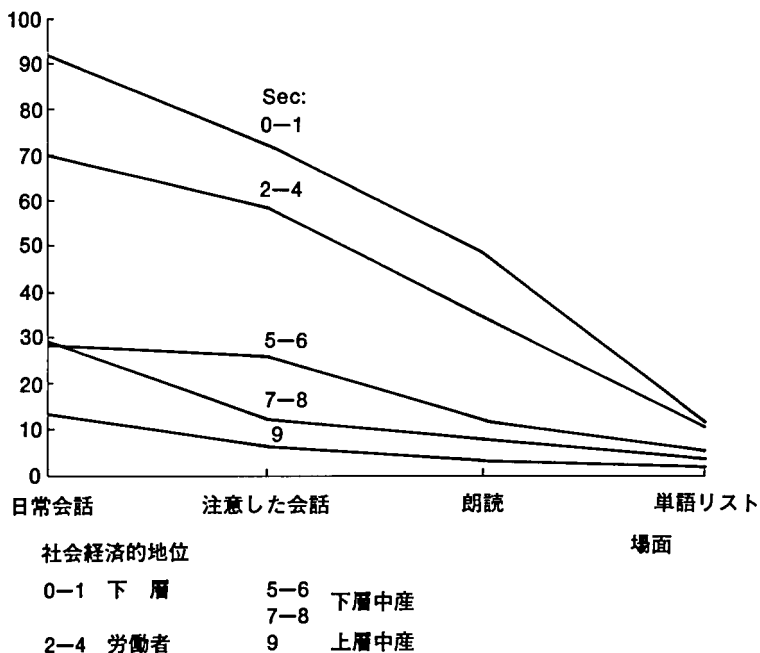
また、既に示した調査結果から明らかなように、/r/を発音するかしないかは、二者択一的な定性的差異ではなく、量的な差異であることも言を俟たない。即ち、/r/音を発音するか否かは、程度の問題であり、その度合いは、単一の要因ではなく、複数の要因によって定まるのである。

ラボブらの調査およびそれ以後の調査によれば、/r/が社会経済的地位の指標と見なされているにもかかわらず、/r/だけでなく、同様に社会経済的地位と高い相関を示す多くの言語要素が存在する。しかも、このような言語要素は、発音に限らない。そして、これらの言語要素は、社会経済的地位と、/r/と同じかきわめて近い相関のパターンを示す。

そのひとつの例が、“thing”, “think”等における‘th’の発音である (Labov 1972 188-190)。標準的な発音は、「歯間摩擦音 (interdental fricative)」であるが、非標準のスティグマ的発音として破擦音、破裂音も行なわれる。図5は、このような非標準音を発音する度合いと社会経済的地位及び注意の集中度との相関を図示したものである。

図5 'th'の発音と社会経済的地位および場面との相関

縦軸は、非標準的な発音が行なわれる度合いを示す



出所：William Labov 前掲論文， p. 189

類似の言語要素は、他にも多く報告されている。英語の‘jumping’, ‘running’などにおける‘-ing’形を‘-in’と発音する場合もそのひとつである (Laver and Trudgill 1979 20)。表2は、英国のノリッジ (Norwich) における調査結果を示したものであるが、ここでも、非標準的な形式の使用率と社会経済的な地位および性別、場面との相関は明瞭である。就中、中産階級と労働者階級の間に極端な落差に注目すべきであろう。

表2 ノリッジ(Norwich)における '-ing' の発音と社会経済的地位および性別との相関

(数値は, '-in' と発音する比率を示す)

	公 式	非公式	男 性	女 性
中産	3 %	28%	4 %	0 %
下層中産	15	42	27	3
上層労働者	74	87	81	68
中流労働者	88	95	91	81
下層労働者	98	100	100	97

出所：John Laver and Peter Trudgill (1979) p. 20 および Trudgill 前掲書, p. 92 より作成。

純粹に文法的な要素としては, 'I don't want none' (Trudgill 1974 91) のような英語の二重否定の問題がある。表3に示すように, 二重否定の使用率は, 社会経済的地位および性別いずれとも高い相関を示す。

表3 デトロイトにおける二重否定の使用率

	男性	女性
上流中産	6.3%	0.0%
下層中産	32.4	1.4
上流労働者	40.0	35.6
下層労働者	90.1	58.9

出所：Trudgill 前掲書, p. 91

また, 他の文法的要素について言えば, 英語の三人称単数現在の動詞に, "s" をつけるか否かが社会階層と密接な相関を示す場合もある。米国のデトロイト

(Detroit) と英国のノリッジの調査結果によれば, “s” を付けない形が使用される比率は, 表 4 に示すように, 社会階層が低いほど高くなる (Trudgill 1974 43-44)。即ち, 社会経済的地位とこの形の使用率とは高い相関を示すのである。また, 中産階級と労働者階級の極端な落差はいずれの都市においてもきわめて顕著である。

表 4 ノリッジとデトロイトにおける -s のない三人称単数動詞と社会経済的地位の相関

ノリッジ		デトロイト	
中産	0%	上流中産	1%
下層中産	2%	下層中産	10%
上層労働者	70%	上層労働者	57%
中流労働者	87%		
下層労働者	97%	下層労働者	71%

出所：Trudgill 前掲書, p. 44

さらに, このようなパターンを示す言語要素は, 英語に限らない。サンコフらのモントリオールでの調査によれば, フランス語の代名詞, 冠詞等の /l/ 音が発音されない度合いは, 表 5 に示すように, 文法機能による程度の差こそあれ, 職業, 性別と高い相関を示す (Sankoff 1989 27)。このデータでは, 文法機能といった言語内的要因もまた, 当該の要素が実現される確率を規定する変数となる。しかし, ここでは, このような言語内的変数に関しては論じない。

このような調査データを考慮に入れるならば, 例えば社会経済的階層の差異が, 単に母音の後の /r/ のみならず, 他の多くの言語要素の差異と同時に実現されていることは明らかである。言語的差異は, 個別的语言要素の言わば束として実現されていると言わねばならない。それゆえ, 結論的に言うならば, 現実の言語様式の差異は, 単一の言語要素ではなく, 個別言語要素の集合として, 定性的な

形ではなく、量的に、そして特定の集団間の差異のみならず、他の要因を含む複数の要因によって定まるのである。

**表5 モントリオールにおける /l/ 音の脱落**  
 数値は、 /l/ が発音されない比率を示す

要素	Professional		Working class	
	女	男	女	男
il (impersonal)	94.7%	98.5%	100.0%	99.4%
ils	67.7%	88.4%	100.0%	100.0%
il (personal)	54.0%	90.0%	100.0%	100.0%
elle	29.8%	29.7%	74.6%	96.4%
les (pronoun)	16.0%	25.0%	50.0%	78.1%
la (article)	3.8%	15.7%	44.7%	49.2%
la (pronoun)	0.0%	28.5%	33.3%	50.0%
les (article)	5.4%	13.1%	21.7%	34.6%

出所：Sankoff (1989), p. 27

言語様式の差異は、現実には、複数の要因に規定される、複数の言語要素の量的な差異の集合として実現される。にもかかわらず、言語的差異は、母音の後の /r/ の例に見るごとく、社会経済的階層の差異による /r/ の発音の有無として認識される。即ち、特定の集団間の差異のみを反映する特定の言語要素の差異として認識されるのである。

この認識の過程では、3つのレベルで極端な単純化が行われている。まず、言語様式の差異が単一の言語要素の差異に還元される。単一の言語要素の差異は、量的な差異ではなく、定性的な差異に還元される。そして、この言語要素の差異は、複数の要因ではなく、単一の要因に還元される。現実の言語的差異は、このような単純化、あるいはステレオタイプ化のプロセスを経て、特定の集団間の差異のみを反映する特定の言語要素の二値的定性的差異として認識される。しかも、その差異は、ロシア語とウクライナ語の関係や /r/ 音の評価にも明らかのように、

同様に二値的な価値判断を伴う。

## 結 語

言語的差異の上述の認識のあり方に関し、認識なり知覚の効率という要因を無視することはできないであろう。また、言語に即して言えば、このような認識レベルにおける単純化は、無限に多様な人間の現実の音声を、有限個の二者択一的「弁別素性 (distinctive feature)」の束である音素として認識する例にも見られるのみならず (Jakobson, Fant and Halle 1952 3), 弁別素性の概念を言語のあらゆる側面に適用するならば、二項対比的知覚と認識は言語のあらゆる側面に浸透しているとも言える。このような観点からすれば、言語様式の差異が、二値的定性的に認識されることは特に問題にするに当たらない。

しかしながら、問題は言語様式の差異が、二値的に認識されることそのものにあるのではない。本稿における議論を要約するならば、問題は、ふたつある。

第一は、言語様式の差異が、既に述べたように、特定の集団間の差異として認識されるということである。ロシア語とウクライナ語の差異は、ロシア人とウクライナ人の差異として、標準英語と黒人英語の差異は、白人と黒人の差異として、あるいは中流と貧困層の差異として、/r/の発音の有無は、上層と下層の差異として、認識される。言語様式の現実の差異が、既に見た如く、このような集団の差異という変数のみによっては説明しきれないことを考えるならば、このことは、このように認識された言語様式の差異が、集団間の差異の象徴として機能することを意味する。量的な差異が二値に還元されることは、この解釈を補強する。逆に言えば、集団間の差異の、それゆえに集団の固有性や独自性の象徴であるからこそ、二値という形で差異が、場合によっては同一性が、強調されるのである。

このような象徴的意味における言語的差異、あるいは言語様式の独自性が、集団の象徴として機能することは、既に指摘されていることである (Inglehart and Woodward 1972 372, Connor 1972 338)。そしてまた歴史的事例も多い (松尾 1989 65-6)。

第二は、既に明らかにしたように、この認識には二値的な優劣の価値判断が伴

うということである。このような認識と評価が不平等な集団の一方のみならず、双方に共有される時、あるいはマスメディアや教育を通じて強要される時、それは不平等を維持あるいは固定する装置として機能するのである。虚偽意識、文化的ヘゲモニー等々、どのような視点を取るにせよ、言語的差異のこのような認識が、不平等の維持、強化に大きな役割を果すことは否定できない。また、逆に言えば、集団の独自性の主張も、ウクライナの事例に見たごとく、往々にして、このような認識を打破し克服するという形で、集団に固有の言語とそのかけがえのない価値の主張という形で、現われることになるのである。詳細は、別稿に譲らざるをえないが、19世紀から20世紀にかけての東欧諸国、戦後西欧の地域紛争などその事例は多い。

本稿では、現実の言語的差異が、いかにして集団間の差異の認識と評価に至るかを明らかにした。そこでは、現実の言語現象についての、「二値化の誤謬」とも称すべき認識が働いている。しかし、「二値化の誤謬」は、「均一化の誤謬」とも言うべき他のひとつの認識に支えられている。なぜなら、言語的差異を、ふたつの集団の差異に帰するためには、当該集団の言語様式の均一性が必要条件となるからである。特定の集団の構成員が、均一な言語様式を共有しないのであれば、言語的差異をその集団に帰することはできない。本稿では、このような均一性の仮定が集団間の不平等に関わる過程を検討する余裕がなかったが、それが単なる認識から規範に移行するとき、それは、従属的集団に対する支配集団の言語の強制といった事態をも生ぜしめる。残された検討課題である。

## 引用文献

- Anderson, Barbara A. and Brian D. Silver (1990), "Some Factors in the Linguistic and Ethnic Russification of Soviet Nationalities: Is Everyone Becoming Russian?" Lubomyr Hajda and Mark Beissinger (eds.) (1990), *The Nationalities Factor in Soviet Politics and Society*, Boulder: Westview Press, pp.95-130
- Apte, Mahadev L. (1976), "Multilingualism in India and Its Socio-political Implications: An Overview," O'Barr and O'Barr (eds.) (1976), pp.141-164
- Bailey, F. G. (1976), "'I-speech' in Orissa," O'Barr and O'Barr (eds.) (1976), pp.253-276
- Baratz, Joan C. (1970), "Teaching Reading in an Urban Negro School System," Williams



- (ed) (1970), pp.11-24
- Bauman, Richard and Joel Scherzer (eds) (1989), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, 2nd ed, Cambridge: Cambridge University Press
- Bernstein, Basil (1972) "Social Class, Language and Socialization," Giglioli (ed) (1972) pp.157-178. 初出: Basil Bernstein (1970), *Class, Codes and Control vol.1: Theoretical Studies towards a Sociology of Language*, London, Routledge and Kegan Paul
- Butters, Ronald R. (1989), *The Death of Black English: Divergence and Convergence in Black and White Vernacular*, Frankfurt: Peter Lang
- カレール=ダンコース, エレーヌ (高橋武智訳) (1981), 「崩壊した帝国: ソ連における諸民族の反乱」, 東京: 新評論
- Chaklader, Snehamoy (1990), *Sociolinguistics: A Guide to Language Problems in India*, New Delhi: Mittal
- Chall, Jeanne S., Vicki A. Jacobs, and Luke E. Baldwin, (1990), *The Reading Crisis: Why Poor Children Fall Behind*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press
- Comrie, Bernard (1981), *The Languages of the Soviet Union*, Cambridge: Cambridge University Press
- \_\_\_\_\_ (1990) "Introduction", Comrie, (ed) (1990a), pp.1-19
- Comrie, Bernard (ed) (1990a), *The Major Languages of Western Europe*, London: Routledge
- \_\_\_\_\_ (ed) (1990b) *The Major Languages of East and South-east Asia*, London: Routledge
- Connor, Walker (1972), "Nation-Building or Nation-Destroying?" *World Politics*, XXIV, 3, pp. 319-355
- Edelman, Murray (1977), *Political Language: Words That Succeed and Policies That Fail*, Orlando, Florida: Academic Press
- Giglioli, Pier Paolo (ed) (1972) *Language and Social Context: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin
- Green, John N. (1990), "Romance Languages," Comrie (ed) (1990a), pp.103-199
- Gumperz, John.J. (Selected and Introduced by Anwar S.Dil) (1971), *Language in Social Groups. Essays by John J. Gumperz*, Stanford, California: Stanford University Press
- 萩原直 (1989) 「ルーマニアの民族と文化」, 南塚信吾 (編) (1989), pp. 169-209
- Haugen, Einar (1990), "Danish, Norwegian and Swedish," Comrie (ed) (1990a), pp.147-169
- Hayakawa S. I.(1963), *Language in Thought and Action* (3rd ed.), New York: Harcourt Brace Jovanovich
- 広瀬崇子 (1989) 「南アジア —バンジャープ紛争とインドの国民統合の課題—」, 有賀貞他

- (編) (1989) 『講座国際政治 3 : 現代世界の分離と統合』, 東京: 東京大学出版会, pp. 261-282
- Hudson, Richard A. (1980), *Sociolinguistics*, Cambridge: Cambridge University Press
- Inglehart, R.F. and M.Woodward (1972, 1967), "Language Conflicts and Political Community," Giglioli (ed) (1972), pp.358-377. 初出: *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 10 (1967), pp. 27-40, 45
- Jackson, Jean (1989), "Language Identity of the Columbian Vaupés Indians," Bauman and Scherzer (eds) (1989), pp. 50-64
- Jakobson, Roman, Gunnar M. Fant, and Morris Halle (1952), *Preliminaries to Speech Analysis: The Distinctive Features and Their Correlates*. Cambridge, Mass.: The MIT Press
- 木戸 麟 (1977) 『バルカン現代史』 東京: 山川出版社
- Kreindler, Isabelle T. (ed) (1985), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future*, Berlin: Mouton de Gruyter
- Labov, William (1970), "The Logic of Nonstandard English," Williams (ed) (1970), pp. 153-189
- \_\_\_\_\_ (1972) "The Study of Language in its Social Context," in Pride and Holmes (eds) (1972) pp.180-202, 初出: *Studium Generale*, vol. 23, 1970, pp. 30-87
- Laver, John and Peter Trudgill (1979) "Phonetic and Linguistic Markers in Speech," Sherer and Giles (eds.) (1979), pp. 1-32
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1990), "Chinese," Comrie (ed) (1990b), pp. 83-105
- Lyons, John (1981), *Language and Linguistics: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press
- 松尾雅嗣 (1989), 「言語的差異と不平等に関する試論」【広島平和科学】12号, pp. 53-78
- Mallinson, Graham (1990), "Rumanian," Comrie, Bernard. (ed) (1990a), pp. 293-311
- McRae, Kenneth D. (1983), *Conflict and Compromise in Multilingual Societies: Switzerland*, Waterloo, Ontario: Wilfrid Laurier University Press
- 南塚信吾 (編) (1989) 『東欧の民族と文化』, 東京: 彩流社
- Montville, Joseph V. (ed) (1990), *Conflict and Peacemaking in Multiethnic Societies*, Lexington, Mass.: Lexington Books
- Motyl, Alexander J. (1987), *Will the Non-Russians Rebel? : State, Ethnicity and Stability in the USSR*, Ithaca: Cornell University Press
- 中井和夫 (1990) 「ウクライナ——静かな弟?」, 山内昌之他 【分裂するソ連: なぜ民族の反乱が起こったか?】, 東京: 日本放送出版協会, pp. 72-112
- O'Barr, William M. (1976), "The Study of Language and Politics," O'Barr and O'Barr

- (eds.) (1976), pp. 1-27
- O'Barr, William M. and Jean F. O'Barr (eds) (1976), *Language and Politics*, The Hague: Mouton
- Parkinson, Stephen (1990), "Portuguese," Comrie (ed) (1990a), pp. 250-268
- Pride, J.B. and J.Holmes (eds) (1972), *Sociolinguistics: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin
- Ra'anan, Uri (1990), "The Nation-State Fallacy," Montville (ed) (1990), pp. 5-20, 初出 : Uri Ra'anan, "Ethnic conflict: Toward a New Typology," in Uri Ra'anan (ed) (1980), *Ethnic Resurgence in Modern Democratic States: A Multidisciplinary Approach to Human Resources and Conflict*, New York: Pergamon Press.
- Raun, Toivo U. (1985), "Language Development and Policy in Estonia," Kreindler (ed) (1985), pp. 13-35
- Rubin, Joan (1976), "Language and Politics from a Sociolinguistic Point of View," O'Barr and O'Barr (eds.) (1976), pp. 389-404
- Sankoff, Gillian (1989), "A Quantitative Paradigm for the Study of Communicative Competence," Bauman and Scherzer (eds) (1989), pp. 18-49
- Scherer, Klaus R. and Howard Giles (eds.) (1979), *Social Markers in Speech*, Cambridge, Cambridge University Press
- Solchanyk, Roman (1985), "Language Politics in the Ukraine," Kreindler (ed) (1985), pp.57-105
- 外間守善(1977),「沖縄の言語とその歴史」,『岩波講座 日本語 11 方言』,東京:岩波書店, pp. 181-233
- Steiner, Jurg (1985), "Decision Models toward Separatist Movements: Some Conceptual and Theoretical Considerations," Edward A.Tiryakian and Ronald Rogowski (eds) (1985), *New Nationalisms of the Developed West: Toward Explanation*, Boston: Allen and Unwin, pp. 147-156
- \_\_\_\_\_ (1990) "Power Sharing: Another Swiss 'Export Product'?" Montville (ed) (1990), pp. 107-114
- 田中克彦(1981)『ことばと国家』,東京:岩波書店
- Trudgill, Peter (1974), *Sociolinguistics: An Introduction*, Harmondsworth: Penguin
- Wexler, Paul (1974), *Purism and Language: A Study in Modern Ukrainian and Belorussian Nationalism 1840-1967*, Bloomington: Indiana University Press
- Williams, Frederick (1970), "Some Preliminaries and Prospects," Williams (ed) (1970), pp.1-10
- Williams, Frederick (ed) (1970), *Language and Poverty: Perspective on a Theme*, New York: Academic Press